

iPad を活用した活動報告書①

◆報告者氏名： 齋藤真一郎 所属:横浜市立盲特別支援学校 記録日： 2013年 2月15日

◆活動内容のタイトル 「視知覚認知向上のための支援」

◆活動内容の概要:

弱視・知的障害・手指の麻痺をもつ車椅子の生徒に、視覚刺激のあるアプリや手指操作のできるアプリを活用し視知覚認知の向上を図った。回数を重ねていくうちに操作方法にも慣れ、休憩時間等でも使用し楽しめるようになった。

【対象児（群）の情報】

◆学年 : 普通科1年 男子生徒

◆障害名: 知的障害、四肢麻痺、斜視・弱視

◆障害と困難の内容

- ・手指機能に麻痺があることから、その操作性の向上を図りたい。
- ・視覚刺激を意識させ、見る力の向上を図りたい。

【活動目的】

◆当初のねらい

4月より視力の急激な落ち込みにより、すべての場面において視覚刺激の受容をする機会が少なくなってきた。iPadでは視覚刺激を意識させることと同時に本人の意思を伝える場面を容易に設定できるので、効果的に学習ができるのではないかと考え、個別の学習に取り入れることにした。

◆実施期間 5月～2月

◆実施者: 齋藤真一郎 (担当教員)

【活動内容と対象児（群）の変化】

◆対象児の事前の状況

視力が急激に低下していき、いろいろな場面において視覚刺激を受容する機会が少なくなってきた。また、書字に関しても、視覚からのフィードバックが得られず、麻痺もあるために、相手に伝えることができるレベルの文字を書くことが難しかった。

◆活動の具体的内容

活用してきたアプリ

① Farm 1 2 3 ②countable

② ③あわせ10 ④ ならべ10 など

【報告者の気づきとエビデンス】

対象生徒には、本人の実態からは、意欲的に取り組めるものではあったが、学習において大きな変化は特に見られなかった。しかし、麻痺があるため、問題の答えに対して、鉛筆を握って○や×をつけることが難しい本人にとっては、指でタッチするだけで正解・不正解がわかる点においては効果的であった。その問題に対して間違えたとしてもストレスが少なく、学習の持続性という点においては効果が見られたように感じる。また、iPadは液晶発光パネルによる見やすさがよく、動きを注視・追視できることも有効であった。

また、アプリの中では、問題に対して答える際に、時間に制約のあるものがあるが、そのアプリは対象生徒には厳しかった。制限時間ののないアプリの方が、ストレスもなく、慌てずに問題に取り組むことができ、意欲的に学習に取り組めるようであった。